

二〇二四年度

和歌山信愛中学校

入学試験 A日程（午前）

国語（六〇分 一〇〇点）

受験上の注意

- 一 開始のチャイムが鳴ったら、問題冊子のすべてのページがそろっていることを確認して、解答を始めなさい。
 - 二 この問題冊子は1ページから22ページまであります。
 - 三 受験番号は、問題冊子と解答用紙の両方に書きなさい。
 - 四 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 終了のチャイムが鳴ったら、解答をやめなさい。
- 解答用紙は、問題冊子の上を開いたまま裏返して置きなさい。
- （解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。）

受験番号

【一】 次の問いに答えなさい。

問一 次の①～④の——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、⑤～⑧の——線部のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① ピカソの絵を模写する。
- ② 沿道でパレードを見る。
- ③ 綿密な計画を立てる。
- ④ 母に判断を委ねる。
- ⑤ 衣類をしゅうのうする。
- ⑥ 選挙に行つてとうひようする。
- ⑦ 親こうこうをする。
- ⑧ 悪いことをしたのであやまる。

問二 次の①～④の——線部がどこにかかっているかを、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 向こうに 赤い 服を 着た 生徒が いる。
- ② あの 大きな 車は だれの ものですか。
- ③ どうして 君は 昨日 公園に 来なかつたのか。
- ④ 駅の 近くに 建つた、青い 屋根の 建物は、新しい 市民図書館です。

問三 信子さんと愛子さんは「小噺」について先生と話をしています。この会話を読んだ後、①・②の小噺の《 》に当てはまるセリフとして最も適当なものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

信子さん 「小噺」って短い笑い話のことですよ？

先生 そうですね。江戸時代に盛んに作られたと言われていますが、現代風にアレンジされたものもたくさんありますよ。

愛子さん 例えばどんなものがありますか？

先生 カレンダーを買う子どもの話はおもしろいですよ。

店員 「いらっしやい」

子ども 「カレンダーを一つください」

店員 「どんなカレンダーがほしいですか？」

子ども 「うーん、なるべく休みが多いやつ」

愛子さん カレンダーはどれも同じなのに！

先生 そうですね。話を聞く人がみんなそれをわかっているので、子どものセリフがおもしろく感じられるんですよ。

信子さん 漫才の「ボケ」みたいな感じですね。

先生 そうですね。最後のセリフは「オチ」と言われます。

愛子さん おもしろいです。他の小噺も知りたいです。

先生 では、次の二つの小噺の「オチ」のセリフを考えてみてください。

① 「道ばたに鏡が落ちていたから拾って帰ろうと思ったけど、やめたよ」

「どうして？」

「だって」

「」

ア 落とし主が拾いにくるかもしれないから

イ 知り合いに見られたらはずかしいから

ウ 下から人がのぞいていたから

エ 汚よごれていたから

② おおげさな男が言いました。

「私の故郷は冬は大変寒く、話をしていても、しゃべった言葉が全部壁かべに凍こおりついてしまうのです」

「それでは春は」

「」

ア 待ち遠しいでしょうね

イ さみしいでしょうね

ウ あたたかいでしょうね

エ やかましいでしょうね

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

つい何日か前、テレビで①里山の番組を見た。琵琶湖西岸の美しい映像であった。僕は自然の中に吸い込まれていくような気持ちでじっと見入っていた。

そのうち僕はふと気づいた。自然の中に吸い込まれるというこの表現は、I ということに。

A いつも言われているとおり、「里山」は決して「自然」ではないからである。

もとの自然の中に人間が入っていき、木を切ったり、草を刈ったり、いろいろな働きかけをしていることによって生まれたもの、それが里山である。

もとの自然は深くこんもりした林であっただろう。そこはあまり日も差さず、薄暗くひんやりしていて、あまり快適な場所ではなかったに違いない。少なくともそこに腰を下ろし、のんびり弁当でも開いてくつろぐという気になる場所ではなかったろう。しかし人が入っていった薪にする木を採り、小屋を建てる材木を切り出し、あるいは林の緑を切り開いて小さな畑を作ったりというようなことをしていくと、林は少し明るくなり、やがて明るい場所を好む草や灌木も生えてくる。

その草木に花が咲けば蝶もやってくるし、花蜂たちも訪れる。草木にはいろいろな虫がついて葉を食べる。B その

ような虫たちを求めて小鳥たちも姿を見せる。きつとこんなふうにして林は少しずつ変わっていったのだろう。

そこにはいわゆる②自然の傾斜ができてくる。深い林から少し開けた明るい林、そして草地、畑、人家という傾斜が。

これが「里山」なのだ。僕は思っている。つまり里山は「里山」という「山」ではなく、人と自然が交錯する所、基本的には人里なのである。

そこでは人と自然が共に生きているのではない。人は自然の中に入っていくって、自然に対して何らかの働きかけをする。そこをただ歩くだけでも、それは働きかけである。人は地面に生えた草を踏み、何匹かの虫を払い落としたり踏みつぶしたりする。木も

切るであろうし、草も刈る。

C 自然も負けていない。切られた木は元の状態に戻ろうとして若枝を伸ばし、草はまた生えてくる。虫たちもせつせと子孫を残す。こうして人と自然のせめぎあいが続いていく。これが里山であり、人里である。

こうして生まれた里山は、もともと深く暗い林と違って、人間が親しみと安らぎを覚える場所になる。それが近年の里山賛美の源であることは疑いない。

けれど里山を賛美するあまり、^③奇妙なことも起こっている。たとえば里山への人の立ち入りを禁止したり規制したりというものその一つだ。

人が入って働きかけることをやめれば、里山の自然はたちまちにして元へ戻っていく。それは人間の入っていきにくい、少なくともあまり快適ではない場所になってしまい、^X里山の「荒廃」が起こる。今や各地で、里山の荒廃が問題とされるに至っている。その一方、里山の美への憧れはますます高まっている。里山の美しい映像は人々の心を打ってやまない。どうやら人々は、ここに自然の美を求めているように思える。今やつと、人工の美ではなく自然の美を求める気持ちになってきたのだろうか？ もしそうであるなら、それは喜ばしいことであろう。

でも果たしてこれで十分なのだろうか、僕はときどき考える。

少し前に述べたとおり、里山は決して自然そのものではない。それは自然と人間の^④人間は徹底した自然を求めるとを忘れると、^④人間は徹底した自然を求めることになりはしないだろうか？

地球上で徹底した自然というのは、地震とか噴火とか暴風、大雨などのように、人間にとっておそろしいものであることが多い。人間はそれを求めていないし、美しいものとも思っていない。

一方、人間は人工物を徹底的に発達させ、その利便さを享受している。

それはそれでよいのだし、それが人間の偉大さでもあるのだが、人々はそこに一抹の不安をも感じている。その反動が自然礼賛

II

の産物なのである。もしこのこ

の気持ちの源であることも否めない。どうやら人間は、徹底した自然と徹底した人工という両極端の間をさまよっているのではないだろうか？

そんなふうに見てみると、里山というのは意味深いものである。それは繰り返す言おうとおり、里山が自然と人間の産物だからである。

人間は雨露をしのぎ、できるだけ快適に暮らすために、自然の一部を破壊して家を建て、町を作る。家や町の中に自然が入り込んできてほしくない。そこで人間は自分のまわりを管理する。

庭は自分の思うようにしつらえ、道も交通も管理する。子どもの遊び場までもきちんとしつらえ、人工の遊具を設置する。都市は計画的に作られ、建物もできるだけ自動化する。こうしてできる限り利便性に富み、安全な人工的環境ができあがる。けれど絶えず報道されるとおり、そこにはさまざまな、そして予見しがたい危険が絶えないのだ。

人間と自然のせめぎあいの結果として生まれた里山は、これとはかなり異なっている。

それはそれほど利便性に富んだものではない。けれどそこでは何らかの安らぎを感じることができる。危険はないことはない。早い話がうっかりすれば蚊や時には蜂に刺される。子どもが木に登って遊んでいけば、落ちることもある。けれどその危険の多くは、人工的遊具の場合と違って予見できる。そういう危険を予見するトレーニングは、生きていくうえで不可欠である。

自然を追い払ってすべてを人工的に管理することより、身のまわりに自然とのせめぎあいの場を残した人里に生きるほうが楽しいのではないだろうか。

(日高 敏隆『セミたちと温暖化』より)

問一 ー線部①「里山」とありますが、筆者は「里山」はどのようにしてできたものかと言っていますか。本文中から六十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問二 本文中の I に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 里山の美しさを表すには十分なものではないか
- イ 里山については適切なものではないか
- ウ あらゆる自然について言えることではないか
- エ 里山のことを最もよく言い表した表現なのではないか
- オ 里山のことをよく知っている人の言い方なのではないか

問三 本文中の A と C に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じものを二度選んではいけません。

- ア つまり
- イ そして
- ウ あるいは
- エ しかし
- オ なぜなら

問四 ——— 線部②「自然の傾斜」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 林、草地、畑、人家が明確な境界線によって区分されているところ。

イ 林、草地、畑、人家のうちの一つが一定の場所を占領^{せん}しているところ。

ウ 林、草地、畑、人家が一つの場所に密集して存在しているところ。

エ 林、草地、畑、人家へと連続的に移り変わりながら接しているところ。

オ 林、草地、畑、人家が広い範囲^{はん}のあちらこちらに点在しているところ。

問五 ——— 線部③「奇妙なこと」とありますが、なぜ「奇妙」のですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人の立ち入りを禁止したり規制したりするのは、里山のすばらしさをだれにも感じられなくしてしまうものだから。

イ 里山を賛美しすぎると、せっかく徹底的に発達させてきた人工物を遠ざけようという発想を生んでしまうから。

ウ 人の立ち入りを禁止したり規制したりするのは、里山に無理やり入ろうとする人を増やすだけのものだから。

エ 里山を賛美しすぎると、里山に人を呼び寄せることになり、里山の自然を破壊してしまうことになるから。

オ 人の立ち入りを禁止したり規制したりするのは、里山の成り立ちそのものを否定してしまうものだから。

問六 本文中に二カ所ある II には同じ言葉が入ります。その言葉を本文中からひらがな五字でぬき出して答えなさい。

問七 ——— 線部④「人間は徹底した自然を求めることになりはしないだろうか？」とありますが、筆者は「徹底した自然を求めること」に対して否定的です。それはなぜですか。「徹底した自然はく」から始めて、五十字以内で答えなさい。

問八 ~~~~~ 線部X「里山の『^{こうはい}荒廃』」とありますが、この文章を授業で習った後、荒廃に「」が付いていることについて、信子さんと愛子さんが話をしています。次の会話文に二カ所ある には、本文中の同じ言葉が入ります。その言葉を本文中から七字でぬき出して答えなさい。

信子さん ここで「荒廃」に「」が付いているのは、なぜだろう。

愛子さん 会話文ではない場所に「」を付けるのは、他の文章を引用する時とか、筆者がその言葉を強調したい時とか、筆者独自のニュアンスや定義付けをした言葉を用いた時とか……そういう時に使われるよね。

信子さん そうか、じゃあここでは、筆者が「荒廃」を強調したかったのかな。

愛子さん それもあるかもしれないけれど、それよりも、筆者が独自のニュアンスや定義付けをした言葉を用いた、ということじゃないかな。

信子さん 独自のニュアンスとか定義付けって、どういうことだろう。

愛子さん

「荒廃」の辞書的な意味は、「荒れはてること」だよね。けれども、里山の「荒廃」の場合は、里山の自然が「荒れはてること」というより、里山の自然が ことだから、一般的な意味の「荒廃」とは、少し違うんじゃないかな。

信子さん

でも、それってやっぱり「荒れはてること」なんじゃないの。

愛子さん

人間の側から言えばそうなるよね。でも、自然の側から言えば、ただ だけだから、ここでの「荒廃」は、人間側にだけ立った「荒れはてる」という意味で、それが筆者の独自のニュアンスとか定義付けということなんじゃないのかな。

信子さん

なるほどね。

問九 里山について、筆者の考えと異なるものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 里山は、人と自然が交錯するところである。

イ 里山は、それほど利便性に富んだものではない。

ウ 里山の危険の多くは、予見することができない。

エ 里山では、何らかの安らぎを感じることができる。

オ 里山の美しい映像は、人々の心を打ってやまない。

カ 里山では、のんびりくつろぐという気になれない。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここ最近、ぼくらのクラスは朝のホームルームで

A

的に合唱の練習をしている。

練習を始めて一か月がたつので、ぼくたちの合唱も徐々に さまにはなってきた。

指揮者を囲むように半円形になって歌うから、ぼくの立つ位置からは、近田さんの歌う姿がよく見える。

歌っているときの彼女の目はまっすぐで澄んでいて、いつもの少し物覚えの悪い近田さんとはまるで別人のように見える。そのギャップがすごくて、気づくといつも、ぼくは指揮者よりも近田さんばかりを見ている。はっとして、あわてて指揮者に視線を戻す、毎朝それをくり返している。

「なんか、最近合唱楽しいよな！」

ある日の帰り道、三人で歩きながら、ハセが言った。

「けっこう歌えるようになってきたし、あとは枝野とか、あのへんがもっとまじめにやったら一体感が出てもっとよくなると思うんだよな」

ハセは何度も枝野とその子分である三谷・浅野に「ちゃんと声出せよな！」と言っているが、彼らは全然やる気を出さない。

「金賞取りたいなあ。ハセ君もサク君も、がんばろうね」

近田さんは鼻をふくらませて言った。

翌日、昼休みに教室で、おう美術部、と声をかけられた。ぼくを美術部と呼ぶ人間はクラスにひとりしかいなくて、それは枝野だ。

ハセは給食が 終わるやいなや運動部の男子とともに教室を飛び出して体育館にバスケットをしに行っていて、ぼくは近田さんに勉

強を教えていた。午前に習った英語の文法。同じことを三回くり返して説明して、それでも彼女はまだ首を傾げていた。

「ちよっと、むずかしいかな？」

うーん、と近田さんは言った。

そこからさらに三回ほど説明の仕方を変えてぼくは近田さんに文法を理解させようとしたが、近田さんは理解しなかった。ぼくなら一度解説を読めばわかるんだけどな。なんでわからないんだ？ 何がわからないんだ？

「わかんない？」

「えっと……」

「……だからさあ」

① 近田さんが、ぼくを見上げて目を丸くしている。

いまの、ぼくの口から出た音声か？

「あ、違うんだ、あの」

近田さんが下を向いて、教科書に涙がぼとんと落ちた。

近田さんは急に立ちあがり、制服の袖で涙をごしごし拭いて、顔を洗ってくると言った。

そこに枝野がやってきたのだった。

枝野はわけもなくへらへらしながらぼくの机にやってきた。

「美術部さあ、最近、近田と仲いいよな」

と枝野は言った。「勉強教えたりして」

両隣にはいつもの二人がいた。三谷・浅野。

「美術部って、近田のこと好きなの？」

枝野は何度も同じことをぼくに言ってきた。なあなあ、おまえ、近田のこと好きなんだろ？

こういうのは返事をしたらダメなんだ。無視しろ。心の中で唱えながら英語の教科書に目を落とす。

「合唱のとき、近田のこと見すぎだよ、おまえ」

と言われて首のあたりが熱くなる。やばい。顔が赤くなるよときの感じ。

「……見てないよ。気のせいだよ」

② ぼくはつい口をきいてしまった。

「ふーん、じゃ、好きなわけじゃないのか」

「当たり前だよ」

「この前、川で楽しそうに※水切りしてんの見たんだけどさ、佐久田も長谷川も、近田なんかとガキみたいな遊びして喜んでんな」

「……ハセが近田さんを誘って遊びたがるから、めんどくさいけど、ぼくは仕方なく付き合ってるだけだ。べつに、遊びたくて遊んでるわけじゃない」

③ 言いながら胸のあたりに、弱い痛みが走った。てのひらに、見えないくらい小さなトゲが刺さったときのような、弱い痛み。

「ふーん」

枝野は、自分の強さの確認に成功したのだろう。うすら笑いを浮かべ、三谷・浅野を引き連れてそのままどこかへ行ってしまった。

少しして、近田さんが戻ってきた。顔を洗うときに失敗したのか、前髪と、ブラウスの襟のあたりが少しぬれている。気づかれないようにひとつ深呼吸をする。

「あ、おかえり、近田さん」

「……うん」

「さっきの続きだけどさ」

柔らかい口調になるように意識しながらぼくが言いかけると、

「佐久田君、あの、わたし、さっきの説明で、けっこうわかったよ」

近田さんは早口にそう言って、すばやく教科書とノートをまとめた。

「え……」

近田さんはそう言い残して廊下へ走って出ていった。

……もしかして、聞いていたのか？

そういえば、さっき近田さんはぼくのことを「I」じゃなくて「佐久田君」と呼んだ。

ぼくは近田さんを追いかけることもできず、座ったまま呆然とした。

この日の午後、ぼくは近田さんに声をかけることができなかった。

帰りのホームルームが終わり、ハセがぼくと近田さんに「帰るぞー」と声をかけると、近田さんは「用事があるから」と言って

そそくさと帰ってしまった。

本番を三週間後に控え、ぼくのクラスの合唱は順調に仕上がってきていた。ただ、ぼくとハセのいるテノールがやはり弱かった。

それは枝野たちが声を出さないからであることは明白だった。そこが改善されればもっとバランスがよくなるし、気持ち的にもぐつと一体感が出るはずだった。

一度、通して歌い終えて、指揮者を務めるルーム長が案の定、

「テノール、もうちよつとがんばって」

と言った。

続けてハセも言った。

「枝野たち、頼むからそろそろやる気出してくれよ」

「※長谷川調査隊なんて小学生みたいなことしてるやつに言われたくないな」

「おまえなあ……」

「隊員はおまえと美術部と近田だろ？ 活動内容は水切りだっけ」

と枝野は言った。

「いまはそんな関係ないだろう？」

④ ハセは、怒るといよりは、呆れているような顔をした。

B 的でない枝野に対して、角田先生は怒るわけでもなく、ゴリラみたいな顔の下で腕を組んで、黙っている。僕と目が合ったような気がした。

枝野は調子に乗って、例のへらへら笑いを浮かべながら、

「水切りして遊んでるようなガキっぽいやつらと並んで合唱なんてダサイことやっつけられるか」

と言った。

ハセは呆れきっているのか、言葉もなくなため息をついた。

角田先生は沈黙。

近田さんは、かたい表情をしている。

いま、突っ立って、誰かが何かを言ってくれるのを待っていたら、ぼくはきっと、近田さんからの信頼を取り戻すチャンスを生失うだろう。

枝野、とぼくは言った。

「なんだよ美術部」

枝野の目が、ぼくのほうに向く。

クラス全員分の目も、ぼくに集まる。

「水切りって、そんなにガキっぽいか」

「なんだ？ ガキって言われたの、そんなに気にしてんのか？」

「枝野は知らないかもしれないけど、水切り、すごく楽しいよ」

枝野は、ふっとふき出した。

「おまえ、どんだけ水切りにこだわってんだよ」

「へらへらして、みんなの足引っ張ってる枝野のほうが、よっぽど子供だと思う。恥はずかしがってないで、合唱くらいちゃんとやれよ」

⑤ 枝野の表情が強張こわばった。動揺ようが最初いにきて、それから怒いかり、屈辱くつじやくが順番いにその顔かほに表れて、最後に赤あかくなった。

何か言い返してくるかと思ったが、枝野は、

「お、おまえ……」

と言うばかりで、周囲を見回してクラス全体の非難の目に気づき、黙った。

まさかぼくにクラス全員の前でたてつかれるとは思っていなかったの、ショックがでかかったのだろう。それでも何かしら反論をしたかったようで、び、美術部のくせに……と内容のなさそうなことを言いかけたところで、パン、と手を叩たたく音がした。音の主は角田先生だった。

「先生が口出さなくてもちゃんと議論ができるなんて、いいクラスだなあ。この調子なら、金賞も取れそうな気がするな」

なあ、枝野、と角田先生は「あつけらんとした顔で言った。

枝野はうつむいて、黙った。

「じゃ、ルーム長、合唱練習続けてくれ」

角田先生の言葉で合唱練習が再開されたが、朝の練習時間は短いし、枝野がけっこう時間を無駄にしてくれたので、ワンコーラス歌ったところで終わりになった。と同時に、^⑥ハセが無言で、グーにしたこぶしをぼくのこめかみにぐりぐりとやっていた。

「な、なんだよ、やめろよ」

しかしハセはぐりぐりを、しつこくやってくるのだった。

それから一時間目が始まるまでの短い時間に、ぼくのもとにクラスメイトが何人も駆け寄ってきた。

「スカッとした。佐久田君ありがとう、前から枝野にはうんざりしてたんだよ」

「……ああ、うん」

ぼくは、クラスのためでなく、IIがなくなる、ということをおそれただけなんだけどな、と思った。

(小嶋 陽太郎『ぼくのとなりにきみ』より)

注 ※ 水切り：…水面に向かって小石を投げ、石が水面をとびはねて進むのを楽しむ遊び。

※ 長谷川調査隊：隊長のハセ(長谷川)とぼくと近田さんの三人で編成された、近所にある古墳を探検するチーム。

問一 本文中の A ・ B に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 協力
- イ 消極
- ウ 義務
- エ 批判
- オ 自主
- カ 感覚

問二 〜〜線部 a〜c に含まれる言葉の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「さまになる」

- ア 違った様子になる
- イ えらそうな感じになる
- ウ 尊敬できる形になる
- エ それらしい形になる
- オ だらけた空気になる

b 「終わるやいなや」

- ア 終わらないうちに
- イ 終わるとすぐに
- ウ 終わるかどうか
- エ 終わってもいないのに
- オ 終わってからというもの

c 「あっけらかん」

- ア 隠すことなく、はっきりと示す様子
- イ あまりの意外さにあきれた様子
- ウ 気にせず平然とした様子
- エ 恥を知らない、図々しい様子
- オ 非常にいらだたしく思う様子

問三

——線部①「近田さんが、ぼくを見上げて目を丸くしている」とありますが、「近田さん」が「目を丸くした」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 普段の「ぼく」とは異なるばかにした様子に腹がたつたから。

イ 普段の「ぼく」と全く変わらない口調にあきれてしまったから。

ウ 普段の「ぼく」が使わないような言葉遣いがおもしろかったから。

エ 普段の「ぼく」とは違うしつこい態度にうんざりしてしまったから。

オ 普段の「ぼく」からは想像できないいらだった言い方に驚いたから。

問四

——線部②「ぼくはつい口をきいてしまった」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 枝野のするどい指摘に動揺してしまい、反射的にそれを隠そうとしたから。

イ 枝野の自分をばかにした言葉に対して、怒りを抑えきれなくなったから。

ウ 枝野のとんちんかんな指摘に対して、明確に否定しておくべきだと思ったから。

エ 枝野の近田さんをばかにした言葉に対して、許すことはできなかったから。

オ 枝野のずる賢い様子に対して、せめて一言でも言い返したいと思ったから。

問五

——線部③「言いながら胸のあたりに、弱い痛みが走った」とありますが、なぜ「ぼく」はそのような痛みを感じたと考えられますか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア その場を乗り切るために、枝野の機嫌をとるようなことをしたことに對してふがいなさを感じたから。
- イ 言い逃れをするためとはいえ、つい自分の本音を明かしてしまったことに對して情けなさを感じたから。
- ウ その場の勢いとはいえ、思ってもいないことを口にしてしまったことに對して後ろめたさを感じたから。
- エ ごまかすためとはいえ、相手に合わせるようなことを言ってしまったことに對して悔しさを感じたから。
- オ その場の雰囲気とはいえ、再び枝野に對して口をきいてしまったことに對して齒がゆさを感じたから。

問六

本文中の

I

に当てはまる適当な言葉を本文中からぬき出して答えなさい。

問七 ———線部④「ハセは、怒るといふよりは、呆れているような顔をした」とありますが、「ハセ」はなぜ呆れていると考えられますか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 枝野たちは合唱に真面目に取り組まないことを指摘されているのに、関係のない言いがかりをつけてきたから。
- イ おとなしい「ぼく」でさえ、合唱に熱心に取り組んでいるのに、枝野たちはただ恥ずかしがっているから。
- ウ 長谷川調査隊の活動や水切りは、とても楽しいものであるのに、枝野たちはその楽しさを理解しようとしなから。
- エ 枝野たちは全くやる気を出していないのに、自分以外のクラスメイトは誰も直接指摘しようとしなかったから。
- オ 枝野たちがちゃんと歌っていないことを不満に思っているのに、「ぼく」は何も知らないふりをしていたから。

問八 ———線部⑤「枝野の表情が強張った。動揺が最初に来て、それから怒り、屈辱が順番にその顔に表れて、最後に赤くなつた」とありますが、「枝野の表情が強張つた」たり、「赤くなつた」たりしたのはどのようなことが原因となつていると考えられますか。三十字以内で考えて答えなさい。

問九 ———線部⑥「ハセが無言で、グーにしたこぶしをぼくのこめかみにぐりぐりとやってきた」とありますが、この時の「ハ

セ」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 皆^{みな}の悩み^{なや}の種^{たね}だった枝野を仲間につけたことによって、クラスの団結力は高まるだろうと思っている。
- イ 長谷川調査隊や水切りをばかにされたことを怒った「ぼく」のことを、暴力的だと悲しく思っている。
- ウ 「ぼく」の合唱に対する熱い思いを知り、合唱コンクールはきつとうまくいくだろうと思っている。
- エ 普段とは比較^{ひかく}にならない「ぼく」の堂々とした態度に対して、友人としてとても誇^{ほこ}らしく思っている。
- オ 皆から信頼される行動をとった「ぼく」に対して、おいしいところを持っていったと悔しく思っている。

問十 本文中の II に当てはまる適当な言葉を、本文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

【問題はこれで終わりです。】

二〇二四年度

和歌山信愛中学校

入学試験 B日程

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 開始のチャイムが鳴ったら、問題冊子のすべてのページがそろって
いることを確認して始めなさい。
 - 二 問題冊子は1ページから24ページまであります。
 - 二 受験番号は、問題冊子と解答用紙の両方に記入しなさい。
 - 三 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
 - 四 終了のチャイムが鳴ったら、解答をやめなさい。
- 解答用紙は、問題冊子の上に開いたまま裏返して置きなさい。
(解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。)

受験番号

【一】 次の問いに答えなさい。

問一 次の①～④の——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、⑤～⑧の——線部のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① 定規をわすれた。
- ② 停電はもう復旧した。
- ③ ブームに便乗する。
- ④ 思わず構えてしまった。
- ⑤ 雑誌のふろくのメモ帳。
- ⑥ 安全そうちが働く。
- ⑦ 受験生たいししょうの説明会。
- ⑧ りんじのバスが出る。

問二 次のことわざと近い意味をもつ熟語を下のア～カから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じものを二度選んではいけません。

- ① 石橋をたたいて渡る
- ② 棚からぼた餅
- ③ 石の上にも三年
- ④ やぶから棒
- ⑤ 帯に短したすきに長し

ア	半端
イ	不意
ウ	幸運
エ	辛抱
オ	用心
カ	失敗

問三 (1)・(2)の文章を、**例**にならって簡潔にまとめるとき、()に当てはまる内容をそれぞれ十字以内で答えなさい。

例 昨夜とても疲^{つか}れていた私は、ご飯も食べずお風呂にも入らず早々に寝^ねてしまった。

まとめ 昨夜、私は疲れて、早々に寝てしまった。

(1) 英語を上達させるには、どうすればよいのだろうか。それには、毎日英語に触^ふれることが最も効果的である。

まとめ 毎日触れることが、()最も効果的な方法である。

(2) 図書館には、絵本を読む親子、勉強をする受験生、新聞を読んでゆっくり過ご^{すご}すお年寄りなどさまざまな利用者がいる。

まとめ さまざまな人が、()。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

食事は、私たちの日々の生活を根底から支えるきわめて重要な活動である。ヒトだけでなく、あらゆる動物は、ほかの生物を食べ、生きるのに必要なエネルギーを得ている。ただし、食べたものをそのままのかたちで栄養として吸収することはできないため、エネルギーを得るには、食べたものを体内で少しずつ分解し、吸収しやすいかたちへと変えていかなくてはならない。この一連の流れを「消化」と呼ぶ。

空腹でお腹が鳴ったり、食べすぎて胃痛や胃もたれに悩まされたり、食あたりでお腹を下したり、はたまた便秘で苦しんだり。消化に関わる日々の悩みは数えきれない。そのため①消化器官は、ほかの臓器に比べると、日常生活の中で意識することが多い器官かもしれない。

さて、ひとくちに消化器官といっても、胃や腸などいくつもの器官が含まれている。消化器官とは、「口から肛門まで続く長い管状の器官」のことで、食べものの通り道全体を指しているのだ。つまり、消化器官のスタート地点は「口」である。とくに哺乳類においては、消化における口のはたらきは重大だ。なにせ、消化の第一段階は※咀嚼なのだ。「A」

②咀嚼には、大きくわけてふたつのはたらきがある。ひとつ目は、食べたものをかみ砕き、消化しやすくするはたらきだ。硬い歯をつかって繊維を細かくすりつぶすことで、体内での消化が進みやすくなる。そしてふたつ目は、食べたものと唾液をよく混ぜ合わせ、食べたものの一部を分解するはたらきである。唾液の中には、デンプンを分解する消化酵素が含まれているため、食べたものをじっくり噛んで唾液と混ぜ合わせると、そこに含まれるデンプンが分解されていく。「きちんと噛まないと消化に悪いよ」というのはまさにそのとおりで、咀嚼は立派な消化活動なのである。「B」

咀嚼が終わって飲みこんだ食べものは、食道を通って胃へと移動し、胃酸や消化酵素（胃の中にある、タンパク質を分解する酵素）と混ざり合ってさらにドロドロになっていく。多くの人が想像するような消化のプロセスをたどるといっていい。

そして、ドロドロになった消化物は小腸へと進み、脂肪しぼうの吸収を助ける消化液（肝臓かんで作られる胆汁）やタンパク質・炭水化物・脂質という三大栄養素のすべてを分解できる万能な消化液（膵臓すいで作られる膵液）と混ざり合ってさらに分解されたあと、栄養素として吸収される。最後に、大腸で水分やビタミンの吸収が行われ、残ったカスが排泄はいせつされる。③これが消化のおおまかな流れだ。

もうひとつ、本来の意味とはやや異なるかもしれないが、ヒト特有の消化がある。それが、調理だ。「C」刃物はを使って食べものを細かく切り刻んだり、すりつぶしたり、調味料で味をつけたり。調理というのは、きわめて複雑な作業だ。さらに、ヒト以外の動物でも調理のような行動をとることが知られている。I、クマの仲間は狩った獲物えを埋めて肉

を熟成させることがある。II、宮崎県幸島に生息するニホンザルの集団は、食べものを海水にくぐらせて塩味をつけることが知られている。III、日常的に調理を行う動物はヒトくらいのもだろう。とくに、火を使った加熱調理は、人類ならではだ。

「火を使うようになったことが、人類に進化をもたらした」という話を耳にしたことがあるかもしれないが、火の利用による最大の変化は、加熱調理が可能になったという点だろう。これこそが、④人類進化のカギとなる脳きよの巨大化へとつながっていった可能性が指摘てきされている。

ヒトの脳は、ほかのサル仲間比べて飛びぬけて大きくなり、ヒトは高度な知能活動が可能になった。ただし、巨大な脳には弱点もある。脳が、活動するのに大量のエネルギーを必要とする燃費の悪い器官になってしまったのだ。

IV、巨大な脳を持つということは、余計なエネルギーがかかるということの意味する。燃費の悪さを補うには、より多くのエネルギーを摂取せとするか、どこか別のところで節約するかの二択たくである。そこで重要なはたらきをするのが、前述した加熱調理だ。

加熱調理には、食べものをやわらかくし、消化吸収しやすいかたちにする、という効果がある。肉や魚などのタンパク質が多く

含まれる食べものは、火を通すことによりタンパク質の構造が変わるため、生で食べるときよりも格段に消化しやすくなる。

消化は、栄養を吸収して生きるのに必要なエネルギーを得る活動だけれど、消化を行うにも、胃や腸を動かすエネルギーが必要である。火を使った加熱調理は、食べものの消化吸収をよくし、消化に必要なエネルギーを節約する効果をもつのだ。実際に、^⑤ヘビを使用した実験で、細かく切り刻んで加熱調理した餌^{えさ}を与^{あた}えると、生で丸ごと与えたときに比べて、消化に必要なエネルギーが二〇パーセントも減少することが明らかになっている。

つまり調理とは、本来なら体で行う消化活動の一部を体外で行っているとらえることもできる。さきほど「食べものの消化は口に入った瞬間^{しげん}から始まっている」と述べたが、実際には、口に入るよりも前、食事を作るところから消化は始まっているのだ。「D」

消化器官の面白いところは、その動物が食べているものの特性を強く反映する点である。ヒトのような雑食の動物と、キリンのような植物食の動物では、消化器官の特徴^{ちゆうとく}は大きく異なる。「E」

植物を食べて生きる動物にとって一番の課題は「^⑥いかにして、本来、消化することのできないはずの植物から栄養を得るか」ということである。脊椎動物は、通常、枝葉や下草などの主成分であるセルロースを消化して栄養を得ることができないからだ。では、植物を食べる動物たちはいったいどうやって栄養を得ているのだろうか。キワードは「消化の下請け」である。セルロースを消化できる微生物を体の中にすまわせる。そして、その微生物に自分の代わりに消化してもらい、そこから栄養を得るという方法だ。そうすることで、この課題を解決している。

動物たちは自力で栄養分を得るわけではないので、当然、食べた分をすべて栄養として吸収できるわけではない。微生物たちが自身が生きていくのに必要な分は、彼ら^{かれ}の体の中に吸収され、手数料として差し引かれる。「体内の微生物に食べものを与える代わりに、栄養分を作ってもらおう」という、互^{たが}いに利益のある関係は「共生」と呼ばれる。

キリンの場合、微生物のすみかは胃である。胃の一部が大きくふくらんでいて、微生物によるセルロースの消化・分解が行われ

専用のスペースになっているのだ。ここでは胃酸が分泌されることはなく、微生物たちは葉っぱの分解をじっくりと進めていく。微生物による分解が十分に進むと、消化されたものは小腸へと移動し、栄養素の吸収が行われる。このあたりはヒトの消化のプロセスと同様だ。ウシやシカなど、偶蹄類の仲間の多くは同様の消化システムをもっている。

では、キリンと同じように植物を食べて生活するウマの仲間はどうなのだろうか。彼らもキリンと同様に、微生物の力を借りて植物から栄養を得ていて、基本的な戦略は同じである。しかし、同じ戦略であるにもかかわらず、両者の間では、微生物のすむ場所が異なっている。ウマの場合、微生物のすみかは胃ではなく大腸だ。

胃に微生物を飼う動物たちの消化は、とにかく無駄のないエレガントなやり方だ。一方で、大腸に微生物を飼う動物たちの消化は、多少の無駄には目をつぶり、「たくさん食べてたくさん出す」ことを可能にするやり方だ。食べものが少ない環境では、無駄のない前者のほうに適しているが、十分な食べものが存在する環境下では、後者のやり方にも分はある。

どちらのシステムがより優れているか、ここで私には判断することはできない。前者のほうが多様な環境に進出することに成功している一方で、後者のほうが巨大化には成功している。エレガントで美しいことがつねに優れているわけではない、と思うと、なんだか少しだけはげまされるような気がする。

(郡司 芽久 『キリンのひづめ、ヒトの指』より)

注 ※ 咀嚼 … 口の中で食べものをよくかみ砕き、味わうこと。

問一

線部①「消化器官」とありますが、「消化器官」について説明した次の文章の

に当てはまる言葉を、

本文中から十字でぬき出して答えなさい。

一言で消化器官といっても、それを特定することは難しい。なぜなら消化器官とは、いくつもの器官が含まれた
のことだからである。その入り口に当たる「口」のはたらきは非常に重要だ。

問二

線部②「咀嚼そしやくには、大きくわけてふたつのはたらきがある」とありますが、「咀嚼」の「二つのはたらき」とは、ど

のようなはたらきですか。それを説明した部分を本文中から(1)二十三字、(2)三十四字でぬき出し、それぞれ最初と最後の七字を答えなさい。

問三 ——— 線部③ 「これが消化のおおまかな流れだ」とありますが、咀嚼が終わってからの「消化の大まかな流れ」を説明した
ものとして**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 咀嚼が終わって飲みこんだ食べものは、食道を通って胃へと流れていく。
- イ 食べものは胃の中で胃酸や消化酵素によって分解され、栄養素として吸収される。
- ウ 胃の中でドロドロになった消化物は、小腸へと流れていく。
- エ 消化物は小腸の中で様々な消化液によって分解され、主要な栄養素として吸収される。
- オ 最後に、消化物は小腸で水分・ビタミンの吸収が行われ、残りが排泄される。

問四 本文中の I く IV に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。
ただし、同じものを二度選んではいけません。

- ア つまり
- イ しかし
- ウ たとえば
- エ また

問五

——線部④ 「人類進化のカギとなる脳の巨大化」について、クラスで考えました。会話文中の

X

Y

に当てはまる言葉を本文中からXは十五字以内で、Yは三十五字でそれぞれぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

先生 … 脳が巨大化したことによって人類にもたらされたプラス面は、どんなことでしょうか。

信子 … X ことです。

愛子 … そうだね。でも、プラス面だけなのかな。脳が巨大なことでも困ることもあるかもしれない。

信子 … 確かに、脳が巨大化して Y ことは、ヒトにとって困ったこととも言えるんだね。

先生 … そのとおりです。しかし、マイナス面を補うための新たな知恵も脳が生み出していくんですよ。

問六 ー線部⑤「へびを使用した実験」とありますが、この実験で確かめたかったことは何ですか。その説明として最も適当

なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 食材を刻んで加熱する調理は、消化に必要なエネルギーを節約する効果をもっていること。
- イ 食べものを細かく刻むことで、より多くのエネルギーを摂取できること。
- ウ 消化を行うためには、胃や腸を動かすエネルギーが必要になること。
- エ 肉や魚などの食べものは、火を通すよりも生で食べるほうが、消化吸収が容易であること。
- オ 肉や魚などの食べものは、火を通すとタンパク質の構造が変わってしまうこと。

問七 本文中から次の一文がぬけています。「A」～「E」のどこに入れるのが最も適当ですか。記号で答えなさい。

そう考えると、玉ねぎやにんじんをみじん切りにする時間も、単調で面倒な作業ではなく、なんだか荘厳で重要な瞬間に思えてくる。

問八 ——— 線部⑥ 「いかにして、本来、消化することのできないはずの植物から栄養を得るか」とありますが、植物を食べる動物

物たちは、どのような方法でこの課題を解決しているのですか。本文中の言葉を使って五十文字以内で説明しなさい。

問九 本文の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア キリンが食べものを消化する形は、とにかく無駄のないエレガントなやり方なので、ほかの動物たちの消化の形よりも優すぐれている。

イ ウマの仲間が食べものを消化する形は、大量の食べものを消化することに重点が置かれているので、ほかの動物たちの消化の形よりも優れている。

ウ ウマの仲間もキリンも、消化においてはそれぞれ違う形でのプラス面を持っており、どちらが優れているとは簡単に決めることはむずかしい。

エ 動物たちの多様な消化システムは十分な食べものが存在する環境に適した形で発達したので、どれが優れているかは簡単に言うことはできない。

オ ウマの仲間もキリンも、多様な環境に適したヒトと同様のエレガントな消化システムを持っているため、どちらも優れていると言える。

【三】 次の文章は、いとうみく『朔と新』の一節です。高校生で元陸上部の新は、かつて事故で失明した兄の朔から、ブランドマラソン（視覚障がい者のための長距離走）の伴走を頼まれました。しかし、今朝の練習で朔を転ばせてしまった新は、朔に内緒で、代わりの伴走者を探してほしいとコーチの境野にお願いしました。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「新、メール読んだ？」

「メール？」

スマホは盲人でも音声読み上げ機能を使えば、メールでもなんでもできるけれど、入力するのにまだ時間がかかるからと、朔は大抵電話を使う。

5 「見てない。朔からメール来ると思わなかったし」

「オレからじゃなくて境野さんから。オレと新に送ってくれたみたい」

境野という名前に新は一瞬ぎくりとして、「見てない」と短く答えた。

「じゃあ見ておいて。オレもまだ返信してないから。こういうことは新と相談してからじゃないと答えられないし。でもオレは前向きに考えてるから」

10 代わりの伴走者のことだろうか――。

「あとで話そう。新も考えておいて」

朔の声はどこか弾んでいるように聞こえて、新は黙って玄関のドアを開けた。

小一時間ほどして窓の向こうから門を開ける音が聞こえてきた。

15 ベッドに横になったまま目を閉じていると、ほどなくして「入るよ」と朔の声がした。
「暑いな。冷房つけなければいいのに。で、さっきの話だけどう思う？」

「新？」

朔が部屋の中に入ってくる気配を感じながら、新はベッドの上で背中を向けた。

「狸寝入りなんてしてんなよ。小学生じゃないんだからさ」

20 「寝てたんだよ、本当に」

「うそつけ」

朔の声が笑っている。

「うそじゃないよ」

「おまえってさ、寝てるときけっこう歯ぎしりうるさいんだよ。寝息ひとつしないで寝てるなんてのは、狸寝入りしかないだろ」

25 「……………」

「まあいいや、で、メールどう思った？」

新は唇を噛んだ。

まだ見ていなかった。というより見られなかった。

30 数時間前、境野さんに代わりの伴走者を見つけてほしいと頼んだときは本気だった。それはうそではない。自分は伴走者に向いていないし、これから続ける自信もなかった。代わりを探してくれと頼んだのも、それを望んだのも新自身だ。なのに、^①いざとなると胸がざわついた。

新はベッドの上に腰かけて、静かに息をついた。

「境野さんもいいと思ったから、朔に勧めてくれたんだろうし」

「そりゃそうだよ。③ オレにちようどいいって思ったんじゃないかな」

35 ちようどいいって、なにがだよ——。

じりつと首元から流れた汗を、新は手の甲で拭った。

「だったら、オレに相談する必要とかないと思うけど」

「なんで？」

「決めるのは朔だろ！ オレには関係ないし」

40 思わず新が声を荒らげると、朔は顔をしかめた。

「関係ないってことは」

「……ないよ」

朔はため息をついた。

「新がそんなんじゃないや、大会なんて出らんないだろ」

45 「そんなことオレには……大会？」

「十二月の。おまえ、なんの話だと思ってたの？ つーか、メール読んだんだよな」

「……………」

「読んでないのかよ！」

朔はちつと舌打ちして、早く読めとばかりにあごをあげた。

50 〈境野です。十二月に神宮外苑チャレンジフェスティバルというマラソン大会があります。この大会は障がいがあるランナーも一般

ランナーも一緒に参加できます。距離は十キロと五キロ。十キロの制限時間は八十分。君たちなら問題なく十キロで参加できるは

ずです。神宮球場からスタートして神宮外苑を周回するというコースです。出てみませんか？
大会の概要と参加を誘うひと言が書いてあるだけのあっさりとした内容だった。

「どう思う？」

55 読み終わったタイミングで朔に問われ、新はどきつとした。

「どうって、十キロならもう余裕だよ」

「うん。そこはオレも心配してない。完走はできる。でもどうせやるなら入賞を目指したい」

真つすぐに言い切る朔を見つめて、^④新はふつと笑った。おかしとかうれしいというのではない。もちろんバカにしているわけでも呆れているわけでもない。ただ笑ってしまった。

60 やっぱ朔は朔だ。

「いいんじゃないの。可能性はあるよ」

新が言うと、朔は安堵したように表情を緩めた。

「でも、それならやっぱり伴走者は代えたほうがいい」

朔がぴくりと動き、それから頭をかいた。

65 「なんか、うーん、そんなこと言い出すような気がしてた」

驚いて新が視線をあげると、朔は唇をこすった。

「今日転んだこと、気にしてるんだろ」

新はすつと視線を床に落とした。

「おまえってわかりやすいつていうか、マジで単純だよな」

70 「人をバカみたいに言うなよ」

ぼそりと新がつぶやくと、朔は目元にかかった髪かみに息を吹きかけた。

「オレさ、ブラインドマラソンを始めたとき、オレと新はチームなんだって思った。ほら、伴走者ってガイドともいうけど、パートナーともいうだろ、そっちの感覚。でも実際走つてると、やっぱりオレは新に支えられているだけで、パートナーって関係にはなれていないんだってずっと思ってた」

75 「ダメなの？」

「ダメじゃない。ガイドっていう考えかたが間違まちがつてるとも思っていない。ただ、オレはそれじゃあおもしろくないかなって」
「……………」

「今日さ、転ぶ直前、あれってあきらかにオレのペースじゃなかっただろ。焦あせったし、無理だっと思ったし、まあ実際ついていけなくて転んだんだけど、でも、怖こわいとかそういうんじゃないかった。なんていうか、高揚ようしたっていうか。一瞬だけど、知らない世界に足突つつ込んだっていうか」

新は a かぶりを振ふった。

「ランナーのペースに合わせるのが伴走者の仕事で、その逆はない」

「それはわかっている。新の言っていることは正しいよ。伴走者はランナーを導いていくガイドだ」

そう、伴走者はガイドだ——。

85 新は膝ひざの上でぎゅっとこぶしを握にぎった。ランナーの目になり、的確な指示を出して安全に確実にゴールまで導いていく。伴走者が走るのランナーのためだ。自分のためじゃない。

オレには、伴走者として朔の隣となりで走る覚悟覚悟も自信も、資格もない——。

「あのさ、転んだの今日が初めてだからな。毎日走っているのに、一度もなかったんだぞ。新がいつも神経張って伴走してくれていることは、オレが一番わかっているつもりだけど」

90 「でも、ケガさせた」

朔は大きく息をつくど、「ちよつと待つてろ」と部屋を出ていき、筒状つつになっている画用紙を持って戻もどつてきた。

「見てみな」

とまどいながら新はそれを受け取ると、ゴムを外して画用紙を開いた。

95 画面に大きく、笑顔ええの男の子の顔が描かいてある。お世辞にもうまいとはいえない。けれどよく見ると、絵に沿って小さな盛り上がった点がついていることに気がついた。

「その絵、点を指でなぞるとオレにもちゃんと見える」

「これって」

「あのバスに乗つてた女の子がくれた」

「……………」

100 朔と事故のことについて話すのは初めてだった。

「その女の子、バスの中でも絵を描いていたんだろうな。で、クレヨンを落としちゃつたんだ。水色のクレヨン。それがオレの席のそばに転がつてきて、手を伸ばのしたんだけど拾ひろえなくて。で、シートベルトを外して通路に出たとき、事故が起きた。あとのことは覚えてないけど、たぶん吹っ飛んで、頭を打つたんだと思う」

105 あゝの事故で大きなケガをした人や亡なくなった人は、シートベルトをしていなかったと聞いた覚えがある。けれど朔はシートベルトをしていなかった理由を言いわなかったし、両親も朔を問うようなことはしなかった。

「タイミングが悪かつたんだよ」

机のイスを引いて、朔は腰かけた。

「もちろんオレがこうなつたのは、その子のせいなんかじゃない。オレが勝手に拾おうとしただけで、頼まれたわけでもない。で

も、めぐちゃん、あ、その女の子の名前だけど。めぐちゃんは事故のショックでしゃべれなくなっちゃって、四カ月たって声が出るようになって。それでお母さんにオレのことを話したんだって」

朔は淡々と話を続けた。

「めぐちゃんのお母さんたち、いろいろ調べたんだろうな。オレのこと知って、去年の夏ごろかな、うちに手紙くれたらしくて。要は、オレに会いたかったことだったんだけどさ。母さんは反対したらしいけど、父さんがオレのいるところを教えたんだって。で、そのときオレが 厄介になつてた寺に来てくれて、めぐちゃんから、それもらった。めぐちゃん、お母さんと一緒に点字で書いてくれたんだよ。でもオレさ、そのとき点字なんてまったくわからなくて」

そう言ってふつと笑った。

「^⑤すげー恥ずかしかったよ。めぐちゃんは一年生になったばかりだし。そんな小さい子が一生懸命書いておれんところ来てくれたのに、オレはなにやっつてんだろうなって。きつと、来るまで怖かったんだと思うんだ。お母さんにしてもめぐちゃんをオレに会わせること、悩んだと思う。うん、絶対悩んで、迷ったと思う。でも来てくれて」

朔は膝に肘を当て、手のひらを組んだ。

「あのころ、オレぜんぜんダメで、盲学校に行ったのだから、ただ逃げただけだと思う。みつともないだろう。ううん、と新は唇を噛んでかぶりを振った。

「めぐちゃんからもらった画用紙にも、なにが書いてあるのかわからなくて。でもそれをめぐちゃんに聞くこともできなくて。そりゃそうだろう。めぐちゃんはお母さんと勉強して、点字打ってくれたんだよ。それをオレが読めないって。で、自分で読めるようになるうと思つて勉強始めたんだ。事故にあつてから初めてオレ、自分で何かしようって思つた」

新はじつと画用紙を見た。

朔らしき男の子の顔の上に、横書きでたどたどしいひらがなが書いてある。

——おにいちゃんえ

もういたくないですか

おにいちゃんがいつぱい

みえるようになりますように

その文字の上にも、盛り上がった小さな点、点字記号が並んでいる。

135 「この先、もしもどこかでめぐちゃんに会ったら、ちゃんと笑ってほしい。笑って、顔をあげて、たくさん見えるものがあるよって、言えるようになってほしい」

「……それと走ることと、どう関係あるの」

朔はふつと息をついた。

「見たいんだよ。オレは。世の中にあるもの、なんだって見たい」

140 「……………」

「できなかったことができるようになることも、わからないことがわかるようになることも、知らない世界を知ること、全部、オレにとっては見ることなんだ」

ぐうううううと、扇風機せんのかすかな風音が朔の声に混じる。

「見るって、目に映るものだけじゃないんだよ」

朔は柔やわらかく目を細めた。

145 「オレにとって、走るってそういうこと。新はオレにいろんなものを見せてくれる」

問一 〜〜〜線部 a 「かぶりを振った」、b 「厄介になつてた」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「かぶりを振った」

- ア 我慢^{がまん}した
イ とまどつた
ウ 否定した
エ ごまかした

b 「厄介になつてた」

- ア 迷惑^{めいわく}をかけていた
イ 面倒^{どう}だと思つていた
ウ 世話をしてもらつた
エ 修行^{しゆ}をしていた

問二 線部①「いざとなると胸がざわついた」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 境野のメールをまだ見ていないということが朔に知られると、責められるのではないかと怖^{こわ}くなったから。
イ 境野から届いたメールがどのような内容なのか気がなくなってしまい、興奮をおさえられなくなったから。
ウ 朔に意見を求められたが、まだメールを見ていないので、どう答えてよいかわからず困惑^{こんわく}したから。
エ 伴走者になることを辞退したもの、未練が残っていることに気がつき、複雑な気持ちになったから。
オ 自分が朔の伴走者として走ることを考えると、自分に求められている責任を感じ、緊張^{きんぱう}が高まってきたから。

問三 ——— 線部② 「朔に勧めてくれたんだろうし」、 ——— 線部③ 「オレにちようどいい」とありますが、この時点で二人（朔

と新）の会話はかみ合っていない。このことについて、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) ——— 線部②について、新は何を「勧めてくれた」と思っているのですか。本文中の言葉をぬき出して答えなさい。

(2) ——— 線部③について、朔は何が「ちようどいい」と考えているのですか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問四 ——— 線部④ 「新はふっと笑った」とありますが、このときの「新」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選

び、記号で答えなさい。

ア 朔が、陸上部だった自分を頼りにして一緒に走りたがっていることを知り、うれしく思っている。

イ 結果にまでこだわり、意欲的に挑戦しようとする朔の前向きな姿に、朔らしい性格を感じている。

ウ 朔に聞かれたくないことに触れられずに済んだので、このままうまくやり過ぎそうとしている。

エ 境野から送られてきたメールの内容が自分の予想していたものとは違ったので、安心してはいる。

オ 朔にとってはあまりにも無謀な決意を口にしたので、身のほど知らずな朔をからかっている。

問五 ——— 線部⑤ 「すげー恥^はずかしかったよ」とありますが、それはなぜですか。六十字以内で説明しなさい。

問六 次の会話は、——— 線部 「パートナーっていう関係」（73行目）についての話し合いの様子です。これを読んで、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

信子 …… 朔が考える「パートナーっていう関係」って、新が考える伴走者としての役割とは少し違っているよね。

愛子 …… 87行目に「オレには、伴走者として朔の隣で走る覚悟も自信も、資格もない———」とあるように、新は、今朝の練習で朔にけがをさせたことに対して責任を感じている。だから新は、≪ A ≫であることを伴走者の資質として求めているよね。

信子 …… うん。76行目に「ガイドっていう考えかたが間違ってるとも思っていない」とあるから、そのことは朔も認めていることが分かるね。だけど、朔にとっての伴走者はそれ以上の意味があるように感じるよ。

愛子 …… 「見る」ことについての考え方が二人の間で違っていることに注目すると、その意味が見えてきそうだね。

信子 … 新は

I

を「見る」ことだと考えているけど、朔は

II

と考えて

いるよね。だからこそ、朔は「パートナー」に ≧ B ≧ であることを何よりも求めているんじゃないかな。

(1) ≧ A ≧ ≧ B ≧ に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 決して余計な口出しはせず、ランナーの走るペースを尊重する存在

イ ランナーを引つ張りながらも、自分の理想も追い求める存在

ウ 走る限界に挑む^{いど}ときに感じる高揚感^{よち}を味わわせてくれる存在

エ しんどくてもあきらめずにランナーと一緒に完走する存在

オ ランナーの目となって指示を出し、安全にゴールまで導く存在

(2)

I

II

で答えなさい。

に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号

ア 未知の世界に足を踏み入れること

イ 点字が読めるようになること

ウ 心と心が通じ合うこと

エ 視覚的に感じ取ること

オ 相手を信じること

【問題は、これで終わりです。】

【一】

問一	⑤ 付録	① じょうぎ
	⑥ 装置	② ふっきゅう
	⑦ 対象	③ びんじょう
	⑧ 臨時	④ かま
		えて

問二	① オ
	② ウ
	③ エ
	④ イ
	⑤ ア

問三	(1) 英語を上達させるには
	(2) 図書館を利用している

【二】

問一	食べ物のももの通り道全体
----	--------------

問二	(1) 食べたものをかきするはたらき
----	--------------------

	(2) 食べたもの唾を解するはたらき
--	--------------------

問三	イ
----	---

問四	I ウ II エ III イ IV ア
----	------------------------------

問五	X 高度な知能を 能に なつた
----	-----------------------

	Y 活動するの く て しまつた
--	---------------------------

問六	ア
----	---

問七	D
----	---

問八	セ ル ロ ま わ せ て も ら ス を 消 化 だ き る 微 生 物 を 体 の 中 に 消 化 し
----	---

問九	ウ
----	---

--

問一

a
ウ
b
ウ

問二

エ

問三

(2)	(1)
神宮外苑チャレンジフェスティバルに参加すること。	代わりの伴走者。

問四

イ

問五

は	勇	め
現	気	ぐ
実	を	ち
か	出	や
ら	し	ん
逃	て	は
げ	会	小
て	い	さ
ば	に	い
か	来	の
り	て	に
い	く	現
た	れ	実
か	た	か
ら	一	ら
。	方	目
	で	を
	、	背
	自	け
	分	ず

問六

(1)	A
	オ
	B
	ウ

(2)

I
エ
II
ア

問 次の文章を読んで、あなたの感じたことや考えたことを六百字以内で述べなさい。

今、興味のあることや面白いと思えること、あるいは将来の夢や目標があれば、自分だけの「地図」はさらに広がっていきます。

リアルに思い浮かべられない人は、これから先の人生を「長い旅」だと思って、それに必要な持ち物を用意すると考えてみましょう。

遠足や旅行の荷造りは心がワクワクするものですが、それはきつと、持参したお菓子を現地で友だちと分け合ったり、お気に入りの服を着て写真を撮ったり、「使う場面」を想像しているからでしょう。それと同じように「使う前提」で考えれば、知識を得たり、能力を身につけたりすること（＝学び）が楽しくなります。さらに嬉しいことに、知識や能力には「三百円まで」など量的な制約はなく、また、必要に応じて自由に増やすこともできます。しかも、お金は使えば減ってしまうのに、知識や能力は、使っても減らないどころか、不思議なことに増えていくのです。

もっと楽しく、そう、たとえばロールプレイングゲームからイメージしてみるのはどうでしょう。基本アイテムとなる知識と能力は、小中学校までの学校教育を通して身につけたものと考えてください。しかし、これはあくまでも「標準装備」であり、そこから先はプレイヤーである自分をどんなキャラクターに成長させたいかによって、身につけるべき力は変わってきます。多彩な技を繰り出す魔法使いになりたいのか、天下無双の剣の達人になりたいのかによって、修行の内容や順番は違ってくるでしょう。けれども、どのタイプを選ぶにしても、力の身につけ方が「小さなことの積み重ね」であることは変わりません。

ゲームが始まったばかりの（若いうちの）自分は、まだ強力な武器もなく、経験値も乏しい状態です。しかし、いずれ強大な敵を倒すつもりならば、少しずつ経験を積み、必要に応じた戦術等を覚え、より強力な武器を使いこなすことを目指すはずです。そうやって少しずつ自分らしい個性を活かして成長していく過程こそがゲームの醍醐味です。同様に現実世界においても、失敗や挫折を繰り返しながら、学びと実践を通して「自分にできること」や「自分にしかできないこと」を身につけていく過程は、楽しいにちがいません。そしてその経験が、あなたの「地図」をより豊かにしてくれるでしょう。

（梅澤 貴典『ネット情報におぼれない学び方』より）